# もっと明るい明日へ ほほえんで

映画デビューから 60 年余り、いまも第一線を走り続ける俳優の吉永小百合さん。3月に東京で開催した、人生後半を自分らしく生きる大人のための文化祭「Re ライフフェスティバル 2023 春」(朝日新聞社主催)では、「今を生きる」と題して講演。最新作の映画や平和の祈りをこめた朗読活動など、自らの「現在地」をじっくりと語りました(朝日新聞 4 月 2 日)。抜粋して紹介したい。

今秋、123 本目となる最新作の映画「こんにちは、母さん」(山田洋次監督)が公開される。山田監督とは 6 度目のタッグになる。「監督は常にどうすれば一番いい表現ができるだろうと考えて、私たちを指導してくださるし、学校に入っている感じですね。一番すごいのは俳優さんに『顔で芝居しないでください』とおっしゃること。やっぱり心でやるんでしょうね」とふりかえる。「笠智衆さんのように後ろ姿たけですべてを表現できるような俳優に、いつかなりたいと思っているんです」

映画は小さいころから宝物だった。小学校の校庭で「二十四の瞳」を見て、「将来、映画俳優になる」と作文に書いた。

「人生は一度しかないけれど、いろんな人に出会い、演じることができるのは貴重でうれしいことです」。歳を重ねて「そろそろおしまいにしようかな」と思うこともないわけではないが、毎回すてきな役との出会いがあって続けてきた。「これからどうなるかはわからない。でも 123 って、やめる数字じゃないですよね。これからまたかんばっていこうっていう数字かな」とほほえんだ。

映画の主題歌もたくさん歌い、昨年はデビュー曲の「寒い朝」から 60 周年を迎えた。記念の CD ボックスに長年続けている朗読も収録した。戦死した恋人にあてて女性が書いた、長い手紙のような文章の朗読は「何としても吹き込みたかった」という。

朗読には、いつも平和の祈りをこめてきた。今年は戦後 78 年。「それぐらい昔のことですけれど、私たちは戦争のことは絶対忘れてはいけない」と、かみしめるように語った吉永さん。新作映画の撮影が行われた隅田川のほとりは、たくさんの人が空襲でなくなった場所だ。「過去をいろいろ知って学んで、みんなが未来に向かって明るく生きていかなければと、切に思っています」

吉永小百合さんは、青春時代からのファン、あこがれの人であった。吉永さんは歳を重ねるにつれて、円熟味が増してきたと思う。山田洋次監督の最新作の映画が楽しみだ。吉永さんは自分にできる運動で体を整えているという。「人生後半」を自分らしく生きるためにも、吉永さんを見習わなくてはいけない。

(2023 年 4 月 5 日)